

---

# 異世界げえいむ

クトゥルス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界げえいむ

### 【Nコード】

N7138Z

### 【作者名】

クトユルス

### 【あらすじ】

気が付けば知らない小屋の中で、横たわっていた主人公。信じられないほど非現実的なゲームに巻き込まれた彼は、果たしてどうなるのやら……。

## 第一話（前書き）

初登校。果たしてこの作品はのびるのか・・・。

感想、指摘、誤字などがありましたら書いていただくと、作者は喜びます。

## 第一話

意識が覚醒してくる。徐々にぼやけてた視界がはっきりしてくると、知らない天井が視界に飛び込んできた。

「ん……ここは？」

体を起こし辺りを見回すと、目の前には木製の机に椅子。右を見ると、ゲームでしか見たこともないような短剣や盾にが立って掛けている。そして部屋の中央には、細かく彫刻された長方形をした台の上に黒い球体が浮遊していた。

俺の視線は黒い球体に釘付けにさせられた。どこまでも深い漆黒は、そのまま体まで吸い込まれてしまいそうで、見ていて決して気分のいいものではない。

ポケットが振動する。そのことで初めて自分のポケットに携帯が入っていると感じた。手を入れて携帯を握ると違和感を覚えた。そのまま取り出してみると、それは馴れ親しんだ自分の携帯ではなく、全く知らないシンプルな青一色の携帯だった。状況が把握できていない俺は、新着一件と表示されたメールを確認する。メールボックスを開くと、そこにはたった一通のメールだけが保存されていた。

Title 『ゲーム参加にあたって』

『おめでとつございます!!』

あなたは見事、100人のゲーム参加者の一人に選ばれました。

参加者の皆様には、このゲームを最大限楽しんで頂くために、基本的なルールや仕様の説明をさせていただきます。

#### ――仕様――

- ・この世界ではどのような行動をとったとしても、ゲームマスターであるこちらは一切関与致しません。
- ・この携帯の機能は、電話、メールに限って、番号やアドレスを交換している場合のみ可能となります。
- ・皆様のいる小屋の中央にある黒い球体は、このゲームのホームポイントです。その機能については球体へ触れていただければわかります。

・基本的に参加者は、他者のホームへ入ることは出来ません。（例外有り）

・参加者には特典として、一人に一つずつ特性が与えられます。ホームポイントで確認可能。

・この世界での死は現実です。

#### ――ルール――

・ゲームをクリアすることによって、この世界を出る事が出来ます。

#### ――クリア条件――

- ・五億カイルを支払う。（支払いはホームポイントにて可能）
- ・大型ダンジョンの最下層に存在する紋章を五つ集める

#### ――クリア特典――

- ・日本円にして三十億円
- ・こちらの世界と地球を自由に行き来できるようになる『

馬鹿げてる、まずそう思った。どこかの小説のようにすべて本当の話だとしたら、このゲームはいち早く動いた奴が有利になるんだろ

う。しかし、ここが異世界であろうと地球であろうと、俺はまず現状を把握しなければならない。

ベッドから起き上がり黒い球体、ホームポイントへと足を向ける。突然、ホームポイントから青い画面が浮かび上がる。後ろが透けて見えるそれは、SFで出てくる立体映像の画面のようだ。画面の上には『MENU』。その下には『ステータス』 『ホームへの入室許可・許否』 『貯金』 『支払い』。そして一番下には薄く暗くなつてはいるが、『クリア』と表示されていた。試しにそこへ触れてみるが、『クリア条件を満たしていません』と表示されるばかりだった。

自然と口からため息が漏れる。次は『ステータス』へ触れると、

『――あなたのステータス――』

LV・1

特性――吸血鬼

・??????  
・??????  
・??????  
・??????  
・??????  
・??????  
・??????  
・??????  
・??????  
・??????  
『

・・・・・・吸血鬼って、あの吸血鬼か？他者の血を飲みグールへと変える。体を蝙蝠や霧へと変えたり、影に潜む。日光で灰となり、十字架を嫌う。俺の持つ吸血鬼のイメージはこんなものだ。

いろいろ小屋の中を探してみたが、短剣と盾、ナイフ以外には特に無く、仕方ないので外へ出てみることにする。地面に足を着いたとき、ひのきのような香りがした。樹木にしては匂いの強い方だろう。しかし不思議と嫌なものではない。むしろその匂いに清々しささえ感じる。

そして、俺が一番驚いたことは、真夜中の森だということに、視界がはつきりとしている、ということだ。暗い、という認識はあるのだが、明かりなど、草木の隙間から漏れる月光が、森の木々を多少照らしている程度だ。人間の目で見るとこう見えるのだが、額にもう一つ目があるかのような感覚で見ると、まるで第三者の視点から見ているように見えるのだ。何処に何があるかも完全に把握出来る。

その目で少し視野を広げてみると、そう遠くない場所に犬のような獣の姿が視えた。何かの肉を食っている。俺は好奇心で近づいてみることにした。こういうのを、平和ボケというのだろう。近づいて、獣を確認したらすぐに戻ればいいだろうと思った。近づくとつれ、肉を引きちぎる音が聞こえてくる。そして気づいた。いや、気づいてしまった。獣が食っている肉から、明らかに人間のものだと思われる骨が飛び出していたのだ。それを視た俺は

「あ・・・」

気後れし、一步下がってしまい、そこに、たまたま落ちていた枝を踏み折った。

静寂を守る森に響き渡る枝の折れる音。ホントにこれは枝が折れる音かと思うほど、クリアな音が響き渡った。

俺に逃げる暇を与えないかのように獣は振り向いてすぐに襲ってきた。

「うわっ!？」

俺は剣を引き抜き、無我夢中で振り回した。しかし素人の剣などが野生の獣に当たるはずもなく、俺の右腕は獣によって引きちぎられた。

「があああああああああ!！」

引きちぎられた焼かれるような激痛に、思わず叫び声を上げた。痛い。

「・・・え?」

ふと、痛みが嘘のように無くなった。悪い夢でもみたのだと言わんばかりに、無いはずの右腕は、右肩から植物のように生えてきた。

「ー吸血鬼スキル・再生が追加されましたー」

頭の中にアナウンスのような無機質な声が響く。そうだ、俺は今吸血鬼という設定だった。吸血鬼なら霧にも蝙蝠にもなれるはずだ。

自覚した瞬間、さらにアナウンスが頭に響く。

「ー吸血鬼スキル・変身が追加されましたー」

腕を食われようが、足を引きちぎられようが再生する。そう思うと、



自然と恐怖心は消えていった。死ぬ心配が無くなった。それだけで、頭の芯から冴えてくるのがわかる。

俺の再生に警戒していたのだろうか。しばらくこちらの様子を伺っていたが、何も無いと思ったのだろうか。再度姿勢を低くし、飛び掛かってきた。

冷静に剣を抜き、サイドステップで避ける。獣は俺の後方に着地するが、すぐさま方向転換し飛び掛かってくる。それに対し、振り向きざまに剣を思い切りたたき付ける。

グシャツという不快な音がし、獣の頭が吹き飛んだ。正確には、口から上が無くなった。頭は何処かに飛んでいってしまい、本体は近くの木にぶつかり、木もろとも砕け散った。

思考が追いつかない。何が起こった？俺は確かに全力を込めた。これでは、俺が化け物みたいじゃないか……。

――吸血鬼スキル・怪力が追加されました――

手に残った肉を吹き飛ばす感覚が、俺が本物の化け物になってしまったのだということを実感させた。

## 第二話（前書き）

この位のペースで更新出来たらな〜と思ってます。

ですが基本不定期更新です

## 第二話

辺りを散策しながらホームへと向かう。獣の血が飛び散ったパーカーは脱ぎ捨ててきた。血の臭いを嗅ぎ付けた他の獣に襲われる危険を少しでも減らすためだ。服にも多少飛び散ってしまったが、危険は少しでも減らせた方がいい。

草や枝を掻き分けながら歩いていると、獣が先ほどの食っていた人間が落ちていた。その人は驚くことに

「カヒュー・・・コフウ」

ー息をしていた。喉ガ渴ク。こちらには気づいていない。助ける喉ガ渴クべきだろうか？ いや、喉ガ渴クこの状態では助からないだろう。喉ガ渴ク・・・さつきから異常に喉ガ渴ク。血ヲ飲ミタ。生キテイル間ニ飲マナイト・・・。

頭がぼうつとする。思考がマトモに働かない。暖カイ。オイシイ。満たサレ・・・チカラ・・・沸ク。肉ヲ食ベナキヤ・・・ナゼ？ グールにナルカラ。食ベナキヤ・・・食ベナキヤ・・・。

頭が正常にまわりはじめる。俺は何をしていた？ 口元から一滴の雫が顎まで流れ、落ちるのを感じた。それを追うように、視線を落としてしまった。一面に広がる血痕。所々生えている草花は、芸術的なまでにどす黒く、赤に染まっていた。

辺りを見回しても、獣に襲われた人はいない。かわりに、人の眼球だと思われるモノが、一つだけ転がっていた。その視線は自分に注がれているようで、体が震えるほどの恐怖を感じる。いや、どちらかといえば不気味だった。

三つ目の目でホームの位置を確認し、無様に、転がるように逃げる。目玉がこの暗闇のどこから見てくるような錯覚に襲われながら。

小屋が見えてホッと安堵した。俺はそのまま転がり込み、部屋の奥まで行く。振り返って扉の方を確認すると、なんの変哲もない木製の扉は、静寂を保っている。

俺は何をした？ 思い出せ、目を背けるな。俺は一体、あの人だったモノに何をした？

徐々に記憶が鮮明になる。自分の牙を剥き出しにし、それをあの人  
の首筋に突き立てた。そこから溢れ出る血液を、命を、魂を吸い尽  
くした。その人のすべてを吸い尽くしたあと、俺はそいつがゲール  
にならないように喰らった。そいつのすべてを。片目以外の全てを  
喰らったんだ。

自覚した俺を襲ったのは、吐き気でも嫌悪感でもなく、墮ちるよう  
な脱力感だった。それは諦めかもしれない。いや、むしろ開き直り  
なのだろう。すでに嫌悪感さえ抱けない、弱い俺が壊れてしまわな  
いように、開き直って認めた。

――俺は正真正銘の化け物だと。

気付けば朝になっていた。いつの間にか寝てしまっていたようだ。いくら開き直ったとはいえ、精神的には疲れていたんだろう。

窓から差し込む光が、いつも以上に、異常に眩しく感じる。これも吸血鬼の特性だろうか。起き上がり、思い切り伸びをする。ポキポキという背骨の音が心地いい。

これからどうしよか。まずは人と接したい。これをゲームだと称している以上、言葉が通じないということはないだろう。クリア条件にある迷宮の情報も集めなければならぬ。

俺は旅立ちを決意する、といってもそこまで大袈裟なことではない。鳥や蝙蝠に変身してしまえば遠くまで簡単に行けるだろうし、霧に変身出来れば危険もないはず、そう思っていたことだ。

外に出ると、焼けるような日光が襲ってくる。まるで都会の真夏日だ。

「これは・・・流石に熱すぎだろ・・・」

思わずぼやいてしまった。気候自体は涼しい位なのだが、日光のみを熱く感じる。

早く街などに着きたい一心で、俺は鳥の姿になり空高く舞い上がる。どうやら、変身している間は日光を熱いと感じないようだ。

しばらく慣れない不安定な飛行を続け、丁度森を抜け平原に出てしばらくすると、ようやく安定し、辺りを見回す余裕ができた。

すると、馬車が物凄い勢いで走っているのが遠くに見えた。後ろからはどうやら、ハイエナのような獣が6匹位追い掛けている。

馬の手綱を握っている人物は馬を責め立てるようにして鞭を打っている。馬も速度を緩めずに疾走している。あれでは馬はもうすぐバテてしまっんじゃないかと思わせるほどの速さだ。

――面白い悪戯を浮かんだ

直ぐさま俺は体を巨大な西洋の龍にし、急降下する。  
そして、馬車の目の前に降り立った。

手綱を握る人物は目の前に着地した巨大ななにかに驚き直ぐさま馬を止めるが、あれだけの速度で走っていた馬が急に止まれるはずもなく、俺の腹にぶつかると形で止まった。

手綱を握っていた人物は、俺を見上げた途端に

「あ、あああ・・・」

とか細いうめき声をあげながら、事切れたかのように倒れてしまった。慌てて人の姿に戻り、心臓のある部分に耳を当てると、獣のうめき声のみが耳へと伝わってくるばかりで、心臓の波打つ音が聞こえてこない。

軽い悪戯心で死なせてしまった事に少しの後悔を抱く反面、この程度で死んでしまっとは心臓でも悪かったのだろうか。もともと悪いならどちらにしるこの先長くはないだろうと楽観視する。

馬車の中身が気になるが、それよりもこのハイエナ共をどうにかしないとならないな。

ドラゴンから人の身が変わったせいかわからないが、こいつらは

無駄に俺を警戒してくれている。今もグルルと威嚇しながら姿勢を下げて、こちらの様子をうかがうばかりだ。

俺はなんの構えもせず、全身の力を足に集中させ、落ちている小石をハイエナへ向かって蹴り飛ばした。その弾丸のごとき小石は、ハイエナが知覚するよりもはやく、その頭部を吹き飛ばす。

「あ、あはは・・・」

乾いた笑いが口から漏れる。相変わらず物理法則を無視したかのような怪力だ。

知覚出来なかったハイエナ達は右往左往と、検討違いの方向を警戒しだす。その隙を逃すまいと、俺は一気に距離を詰め、2頭目の頭部を蹴り飛ばす。その頭はミンチになり消し飛び、思い出したかのように胴体が遅れて跳んでいった。

他のハイエナもそれに気がついて、一気に襲ってきた。ハイエナ達の中心に立っていることから、俺の状況はまさに八方塞がり。だが、死という根源的恐怖心がなくなった俺は、恐ろしいほどに冷静――いや、冴えていた。

右腕を武器へと変化させる。剣と呼ぶには余りにいびつ。道具と言うには余りに強力な代物。切断という一点においては間違いなく最強であろうモノ。

――チエーンソーだ。

## 第三話（前書き）

正月でございましたして更新が遅れました><

こんなしょぼい小説ですが少しでも楽しんでいただけたら幸いです。



### 第三話

チエーンソー。最もそんな道具、興味を抱いたことも、ましてや使ったことなどない俺が想像できるのは、精々楕円型の鉄の板の周りを、数え切れぬ程の刃が高速で回転している位だ。

それだけだ。しかし、獣を切断するにはそれだけで充分過ぎた。

襲ってきた一番近くのハイエナを切り上げる。狙いが頭部から少しずれ、ハイエナの左前脚の付け根に入った。いびつな刃は、左前脚とその付近の毛、皮、血管、肉・・・それらすべてを巻き込みながら、削るようにして切断し、その肉塊を舞上げた。

その威力に驚いている暇もなく、ハイエナ達は襲ってくる。3匹目は雑ぎ払い、4匹目は叩き潰すようにして削り切る。残り2匹は敵わぬと見たのか、遠吠えを上げながら俺が飛んで来た方向へと走り去っていった。

「・・・ふう」

一旦息をつき、高速で回転し、獣のような唸りを上げている右手を見慣れたもとの腕に戻す。

さて、一段落したところで、先ほど二階級特進したであろう商人らしき人物の懐を漁るとしよう。街に行くなら何にしても先立つものが必要だ。生きていくためだ、怨むなよ？

結局懐から出てきたのは、小さな鍵の束と、500円玉サイズの金色の硬貨13枚。それより一回り小さい銀色の硬貨5枚。一円サイ

ズが一番小さな硬貨が23枚だ。先立つものが手に入ったはいいが、結局この硬貨がどのくらいの価値なのかさっぱりわからないから参ったものだ。鍵の方などなんの鍵かもわからない。

ふと、馬車が揺れた気がした。視線を移すと、確かに微かだがギイギイと軋んでいるのがわかる。生き物でも入っているのだろうか。

取り合えず馬車の後ろまで行き、俺は食べそうな生き物だったら焼いて食おうなどと考えながら、馬車の木製の扉を開く。

日本で生きていたなら、まず見ないだろうその異様な光景に、俺は思わず息を呑んだ。

そこにいたのは、藍赤金とカラフルな髪をした、美少女とっていい程の容姿をした少女達だったが、着ている服はそれに反比例するようにみすばらしいものだった。薄い布一枚をつなげただけの、ポロポロのワンピースのような服だ。そして、彼女達の首についている鉄の輪から伸びている太い鎖が、馬車の壁に繋がれていて、なおかつ彼女達の手足は中世の手枷のような板状の枷が嵌められている。

一瞬で奴隷という単語が頭に浮かんだ。飯はまともに貰っていたのか餓えてはいなさそうだが、全員が若干糞れていた。

死んだ目をしながらこちらを見ているが、その瞳の奥にはあきらかさまな恐怖がある。おそらく服にかかったかえり血が原因だろう。

その証拠に、彼女達は全員体を震えさせている。

俺は構わず中へ入る。足を踏み入れると、一番手前にいる金髪の少女が、ビクツと大きく体を跳ねさせた。その少女へと近づくと、体の震えはさらに大きくなっていく。

俺は彼女の首へと手を伸ばし、彼女の首輪を外した。

「……え？」

目を見開く少女を尻目に、他の二人の首輪も外していく。彼女達は揃いも揃って目を見開き、自分の首を何度も確かめるようにして触る。

いち早く冷静さを取り戻したのは藍色の髪をした少女だった。

「あ、あの……私たちは一体……これからどうなるのですか？」

その言葉に他の二人は硬直する。俺はそんな彼女と他の二人に

「それについても説明するから、取り合えず外に出てくれないか？」

少女は混乱しているんだろうと思うが取り合えず

「は……はあ」

と他の子を連れて外へ出てくれた。俺はこの時は失念していた。先程戦闘をしたばかりだったことを。

「え……？」

外の光景をみてまた彼女達は数秒固まることになった。赤く染まっていた草花の上に、もはや原形を留めていない肉塊が跳び散らかっている。そして生ぐさい血の匂いが、辺りに漂っている。

俺には心地好い光景だが、彼女達にとってこの臭いはきついらしいことが、その表情から容易に想像できた。

「さて、まず自己紹介といこうかな」

この白けた場にそぐわぬ明るい声音で、俺は出来るだけフレンドリ―に接することに努めた。俺はなるべく早く街へ行きたいんだ。悪いが彼女達が自然に正気を取り戻すまで待っていられない。

「俺の名前は楠木くすのぎ 京介けいすけー吸血鬼だ」

「……え?」「」

三人娘の声が綺麗に八もった。そのうち赤い髪の子だけは

「きゅ……吸血鬼様?」

ん? 様ってなんだ。思い切って言ってみたが、この世界で吸血鬼は蔑まれるモノでなくて安心した。

突然赤髪の彼女は、のびたくんの昼寝も真つ青な早さで俺の足元へひざまずいた。

「吸血鬼様! 私めの名はアリスリート・クリセルと申します。この世に吸血族として生を受けているうちに、貴方様、吸血鬼様のお姿を拝見出来たことは、光栄の極み! 今この時をもって、私は貴方様に生涯における絶対な忠誠を誓わせて頂きます」

訂正。蔑まれる種族等ではなく、敬われる種族だったようだ。取り合えず冗談で言っているようには見えない。なにせ先程まで死んだ

魚のような目をしていたのに、今では少女漫画の如く輝いていた  
るからだ。

――正直若干引いた。

「忠誠を誓うと言ったな」

まあこちらにとっては好都合だ。この世界で右も左もわからない俺  
のため、彼女には手となり足となってもらおう。

「はい！」

「では、忠誠を誓う相手のことくらいわかっているのだろうか？」

「もちろんです」

ひざまずきながら、彼女はドヤ顔で顔を上げた。

「なら吸血鬼の出来ることを言ってみろ」

「姿を自在に変え、攻撃を受けても瞬く間に再生する。血を吸うと  
同時に魂を取り込み、グールまたは使い魔にすることが出来る。そ  
の中でも段違いに強力な固体は、太陽や銀を怖れず、物質を創造し、  
知性ある生物を魅了する魔眼を持つと言われています……っあ！」

なにかに気付いたようだが、そんなことはどうでもいい。それより  
も、太陽が平気ということは、どうやら俺は吸血鬼の中でもかなり  
強い固体らしい。それにしても魔眼や物質創造か……。また時間  
がある時に確認しよう。

「太陽が平気ということは・・・ご主人様は物質創造なども出来るのですか!？」

「またもや訂正。どうやら物質創造に関しては今からやることになるようだ。まあやってやるからそんな期待の眼差しをこちらに向けるな。鬱陶しくてかなわん。」

「ようは体を変化させるのと同じ要領だろう。一本の槍をイメージする。すると、俺の手にはすでに槍が握られていた。」

すると赤髪の彼女はさらに顔を綻ばせ

「さすが！　さすがですご主人様！　ああ、私はこんなに素晴らしい方にお仕えすることが出来るなんて感激です」

と早口にまくし立てた。おい、後ろの二人を見てみる。デクの棒のように突っ立っていることしか出来ないじゃないか。

彼女の話はしばらく無視することにしよう。話が進まない。

「その二人、君達はどうする？　この子はもうこれからどうするか勝手に決めちゃったみたいだが。もし近くの街まで送ってほしいというのなら送っていくし、金がほしいなら少しぐらいの路銀なら恵んでやる。どうする?」

急に話し掛けられ、ビクツと身を竦める。恐る恐るこちらを見つめ、お互いに袖を握り合ながら、何一つ喋ろうとしない。先程一番に話し掛けた藍色の子ですら、今では身を竦ませ震えるばかりだ。

「何故黙っている。楠木様が貴様らのような雑種にわざわざ話し掛

けてくださっているのだぞ。なんとか答えたらどうだ?」

おいまして赤いの。急に偉そうに態度を変えやがったな。もしかして吸血族というのはそんなに位が高いのか?

「まあましてアリス。お前がさ、アリス?今私のような下等な者のことを愛称で!?ああ、私はもう歓喜のあまり死んでしまいそうです・  
・・」

頭痛が痛い・・・間違えた。頭が痛い。話が全く進みそうにないな。

ああ、神様。このゲーム主催者様。誰でもいいのでこの状況をなんとかしてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7138z/>

---

異世界げえいむ

2012年1月6日21時35分発行